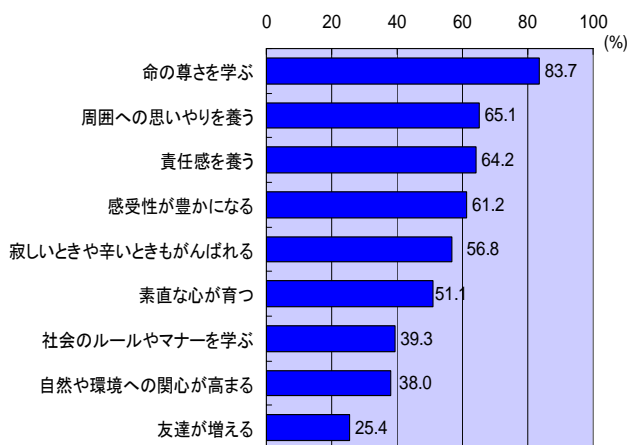


## 「子どもの成長とペット」

前号で、ペットを飼育し始めてから家庭内での会話が増えたなど、「ペット飼育によって家庭に起きた変化」についてマース ジャパンが行った調査の結果を取り上げました。今回は同調査から、「子どもの成長におけるペットの影響」に関する結果をご紹介します。

このテーマの調査でまずわかったことは、とても多くの方が子どもの成長過程においてペットの飼育が何らかの形で役に立つと考えていることでした。ペットの飼育者で約85%、非飼育者でも約65%が「非常にそう思う」あるいは「そう思う」と回答しています。さらに、回答者をより詳細な属性で見ると、実際に育ち盛りの子どもの持つ世代や、自ら幼少期にペットの飼育経験がある層での回答率が特に高く、実際の体験に基づいてこうした認識を持っている人が多いこともわかりました。



では、子どもの成長過程でペット飼育がどのように役立つと考えられているのでしょうか。自らのペット飼育体験から感じたこと、あるいは飼育経験が無い人の場合にはどう想像できるかを聞いたところ、最多の回答は「命の尊さを学ぶ」というもので、全体で84%となりました。次いで、「周囲への思いやりを養う」(65%)、「責任感を養う」(64%)、「感受性が豊かになる」(61%)、「寂しいときや辛いときもがんばれる」(57%)などが続きました。

「命の尊さを学ぶ」という点では、ペットを通して子どもたちが初めて生や死と向き合う場合も多いことから、このような回答結果になったと考えられます。その他の項目については、ペット飼育が、弱いものや自分とは異なるものへの配慮の必要性に気づいたり、飼育の役割分担を通じて責任感を養うなどの良い機会としてみられているのでしょう。

もちろん、年齢や環境によって影響の受け方はいろいろだと思われそうですが、ペット飼育が子供の情緒的成長に良い影響を与え得るという共通した見方があるのは明らかなようです。かつて家庭においては、兄弟姉妹とのつながりが子どもたちにとって他者への思いやりや共存の意識を学ぶ機会であったものの、核家族化や少子化が進む今日の日本では、ペットとのつながりがそうした役割を代わって果たしている面があるのかもしれませんが。この夏休み中、ペットの世話を毎日の日課としてがんばっている子どもたちも多いと思いますが、そこから何かを学ぶことができるとすれば、それはなによりの夏休みの宿題になりそうです。

\*\*\*

マース ジャパンは、製品や社会貢献活動を通して、人とペットが共に暮らす笑顔あふれる社会の実現を目指しています。このニュースレターは、マース ジャパンが人とペットの共生をテーマにした研究や支援活動を目的に 1997 年に設立したリサーチセンターである非営利団体コンパニオンアニマル リサーチ (CAIRC) とマース オーストラリアがサポートするコンパニオンアニマルに関わる活動を推進している PIAS と協力して発行しています。

お問い合わせ: マース ジャパン リミテッド 広報室 電話: 03-5434-3334